

銃後の女に戦争責任を追及する 思想的背景とは何か

—1970 年代在野の女性史研究『銃後史ノート』の分析を軸に—

峯 桃香

本研究の目的は、1970 年代から 1980 年代にみられた女性による、戦時下の女性に戦争責任を追及する戦争観に、当時の女性の思想がどのように反映されていたのかを明らかにすることである。

男女の戦争観は、戦後の体験によって男性のものとは時期と議論において異なる。しかし、これまでの「戦争の記憶」研究では、徴兵やミリタリーカルチャーなどといった男性的な戦争体験や戦後体験によって影響を受けた戦争観が検討の対象になってきた。そのため、女性が戦争体験や戦後の経験を踏まえてどのような戦争観を形成してきたかは十分に検討されていない。その中でも、本研究は 1970 年代から 1980 年代の女性の戦争責任を追及した戦争観の潮流を扱う。

本研究では、その潮流の代表的な雑誌『銃後史ノート』を対象にした。『銃後史ノート』は、当時のウーマンリブの影響をうけつつ、在野の女性史研究活動として行われた。そのため、当時の女性解放運動に関わる女性たちの思想と、在野の女性史研究という特徴が、女性の戦争観にどのように影響を与えたのかを検討した。

第一章では、1970 年代から 1980 年代における女性の戦争責任を問う潮流が生み出された時代の女性解放運動の動きを実証的に検討することで、どのような論理で、なんのために 1970 年代から 1980 年代の女性の加害性が批判されたのかを明らかにした。

『銃後史ノート』の会員、加納実紀代のライフコースから、女性の責任の自覚には、被害者側からの追究と、女性が主体的に戦争を支えていたことが理解されることが要因となることを確認した。高度経済成長のなかで企業戦士と「銃後の女」の構造が出来上がった。一方、女性解放を求める女性たちは、世界の女性の連帯を求めて、日本の経済侵略の被害国の女性と出会うことになる。このことは、女性解放を求める日本人女性に、経済侵略において、加害者の立場に立つことを自覚させた。

そして、世界の女性の連帯を求めるために、また女性という同胞のために、女性の日本人としての加害性を受け止めていく。その加害性に抵抗するため、リブが提起した「女の論理」によって、経済大国化を支える「男の論理」を批判した。この「女の論理」は『銃後史ノート』にも影響を与えていた。女性解放を求める女性たちに共有されていたのは、いつのまにか加害者になってしまう危機感であった。そして、それは戦時下の銃後の女が二重写しとして想起された。

第二章では『銃後史ノート』にみられる在野の女性史研究という特徴を検討してきた。1970 年代から 1980 年代にかけて歴史の主体性を獲得した女性によって、女性史ブームが起きていた。『銃後史ノート』のように在野の女性史研究会による女性史の取り組みも盛り上がりを見せた。在野の女性達が女性史の取り組みを行ったのは、新たな生き方が問われる時代に、身近に変革を求め、より良い生き方を明らかにするためであった。

『銃後史ノート』においても、現代を生活者としてどう生きるかという目的のもと、戦時下の生活者の視点にこだわり検証されていったことを明らかにされた。

第三章では、『銃後史ノート』の分析によって、第一章、第二章で明らかにしてきた当時の女性の思想的背景が、戦時下の女性の戦争体験の解釈にどのように影響を与えていたのかを明らかにした。銃後の女のようにいつの間にか加害者にならないようにという目的のもと、戦時下の女性に加害性を批判した。その結果、現代の生き方を探るという在野の女性史の目的と、女性解放を求める女性達が持つ差別への抵抗意識によって、アジアへの差別意識が、女性の戦時下の加害性として見出されたことを明らかにした。

つまり、1970年代から1980年代の女性に戦争責任を迫る女性の戦争観とそれに影響を与えた思想的背景を検討した結果、女性の戦争観の特徴として、女性という立場と、日常性があえて重要視されて読み込まれる傾向があることが明らかになった。